

第17回

十湖賞

俳句大会 入選句集



浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業

令和7年2月発行

<発行元> 浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会

<事務局> 浜松市中央区東行政センター 地域振興担当

浜松市中央区流通元町20番3号

TEL 053-424-0115

Eメール e-shinko@city.hamamatsu.shizuoka.jp



ガーベラ



弁天島



浜松餃子



みかん

「十湖賞」と「浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業」

松島十湖翁は江戸時代末期、現在の浜松市中央区(旧浜松市東区)豊西町に生まれた俳人にして政治家、さらには地域貢献に務めた篤志家です。生涯に詠んだ句は七千句とも言われ、全国各地に多くの門人がいました。十湖翁の俳句は、松尾芭蕉からの蕉風を継承すべく、花鳥風月といわれる春夏秋冬・四季折々の自然、その中で生活を詠む伝統的なものです。「はま松は出世城なり初松魚」は、「出世の街・浜松」を象徴した、浜松を誇る気持ちを詠んだ句です。

本事業では、こうした十湖翁の遺徳を称えとともに、「郷土を愛する心」を今に伝えるべく「十湖賞」俳句大会を開催しています。

中央区東地域(旧東区)は、古来多くの俳人を輩出するとともに、多くの句碑群を有しており「俳句の里」としての側面もあります。

このような背景のもと、俳句の里づくり事業実行委員会及び浜松市中央区東行政センターでは、「浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業」を行っています。

第十七回「十湖賞」俳句大会入選句集

令和七年二月十一日(火・祝)
於 浜松市総合産業展示館 北館1号ホール

目次

ごあいさつ	2・3
十湖大賞	4
十湖賞	5
区長賞	
県教育長賞	6
市教育長賞	
特選	7
佳作	8・9
奨励賞	10 13

選者

天野 薫氏

(「みづうみ」主宰)

高柳克弘氏

(「鷹」編集長)

村松二本氏

(「椎」主宰)

百合山真苗氏

(「海坂」編集長)

※五十音順



第十七回「十湖賞」俳句大会投句実績

一般の部		高校生の部		中学生の部		小学生以下の部		全 体		一般の部・地域別	
人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	地域	投句数
670	1,319	1,729	3,011	2,123	3,185	1,410	2,204	5,932	9,719	市内	553
										県内(浜松市外)	142
										県外	624
										合計	1,319

※募集期間：令和6年7月1日(月)～令和6年9月30日(月)

浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会

委員長 松島 知次

第十七回「十湖賞」俳句大会は、全体で五千九百三十二人、九千七百十九句もの投句をいただきました。市内外から多くの投句をいただいたことを大変喜ばしく思っております。

近年、感染症や戦争、災害などにより、不確実で不安定な時代がやってきていると言われてます。そのような中で、今大会も皆様には日常のふとした瞬間や、心に留めたい思いを込めた素晴らしい句を詠んでいただきました。俳句作りが、日々の暮らしを丁寧に大切に見つめる時間となっているとすれば、これほど喜ばしいことはありません。

浜松市中央区東地域俳句の里づくり事業実行委員会では、これからも俳句を通じ、郷土を愛する気持ちを育むとともに、俳句文化の振興を図るため創意工夫を重ねてまいります。

終わりに、入選された皆様に心よりお祝い申し上げますとともに、選者の皆様、並びに事業推進にご尽力いただきました関係者の皆様へ厚くお礼を申し上げます。皆様方の今後ますますのご活躍、ご多幸をお祈り申し上げまして挨拶とさせていただきます。

浜松市中央区長 岡安 章宏

浜松市中央区東行政センターでは、中央区東地域ゆかりの俳人で、明治・大正期に活躍した松島十湖翁にちなみ、平成十九年度から「俳句の里づくり事業」を実施しております。

今年度は「十湖賞」俳句大会をはじめ、若年層への俳句の普及を目的とした「小中高校俳句講座」や、市内高校生が俳句の作品性や鑑賞力を競う「高校生俳句選手権」を開催してまいりました。「十湖賞」俳句大会では、市内だけでなく全国各地から多くの皆様に投句いただきましたことを、大変喜ばしく思っております。

今後も、俳句の里として東地域の誇るべき地域性が、市民の皆様の郷土愛の醸成につながることを願っています。

結びにあたり、大会に投句いただいた皆様、選考していただいた選者の皆様、そして本事業に携わっていただいた全ての皆様に深く感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

十湖大賞・十湖賞〈高校生の部〉

春風や迷う自分はもういない

星陵高校一年

林祐斗

評：高校生ならばときには将来や進路に思い悩むこともあるだろう。しかし、作者は「迷う自分はもういない」と力強く言い切っている。実に頼もしい。そして「春風や」という詠嘆が若い体にみなぎる力を感じさせる。
(村松 二本)

十湖賞

〈一般の部〉

生くるものよりあたたかき墓洗ふ

東京都江戸川区 久米 佑哉

評：多くを述べていない分この作者の思いは深い。句の根底には作者の人生観がある。祖父母、両親など今は亡き掛け替えのない肉親の情が「あたたかき」であり、一方で今を生きる人々との希薄な関係性が作者には寂しい。(百合山真苗)

〈中学生の部〉

パスポート手にした夏のアニヨハセヨ

笠井中学校二年 大須賀 菜々子

評：「アニヨハセヨ」は韓国の挨拶の言葉。夏休みにはじめて韓国旅行に行つて、現地の人とも交流して楽しく過ごしたことが、短い言葉で手際よくまとめられている。「手にした」という語に、海外へ通じる扉が開かれた感動を込めた。(高柳克弘)

〈小学生以下の部〉

夢ならば登れるかしらかき氷

県居小学校四年 吉澤 藍

評：小学生らしさ溢れる句。季語はかき氷。暑い夏、かき氷を食した折の景。句材の捉えが個性的であり用いた言葉も作者ならでは。上五を「夢ならば」と切り出し、中七の「登れるかしら」に心の眩きを表した。微笑ましさまでも読み取ることができる句。(天野薫)

区長賞

〈一般の部〉 人生のおまけの時間鰻釣り

奈良県奈良市 浦城 亮祐

評：「余生」と言うのではなく「人生のおまけの時間」という表現に何とも言えない味がある。そして、鯛でも鮎でもなく「鰻」を釣るというのが「人生のおまけの時間」には誠にふさわしいように思われる。俳諧味の感じられる句だ。（村松二本）

県教育長賞

〈高校生の部〉 やめられずラケット取り出す受験前

星陵高校一年 望月 虎太郎

評：受験の為に、日々練習に明け暮れたテニスに区切りを付けなければならない。勉強に集中できるようラケットは見えない場所に隠してあるが集中力が切れるとラケットを振りたくなくなる。心の中の葛藤が率直に詠まれている。（百合山真苗）

市教育長賞

〈中学生の部〉 葉付きビワどんと山盛りすぐ消えた

与進中学校一年 神谷 奏亮

評：採りたての葉付きビワが沢山目前にある。黄橙色・黄白色の実が如何にも美味しそうである。採りたてのビワの新鮮さ・量が沢山なこと・数人であつという間にすべて食したことを、言葉を選び語順を工夫して表した。満足げな笑顔・会話が聞こえる。（天野薫）

〈小学生以下の部〉 ビートバンお前がたよりだったのに

笠井小学校四年 吉井 纏衣

評：「ビートバン」は、泳ぐのを助けてくれる板状の浮きのこと。プールの授業において、ビート板を使わないで泳ぐ段階に入ったのだ。自分の力だけで水に挑まなくてはならない心細さや不安を、ふだん使いの素直な言葉で表現した。（高柳克弘）

特選

〈一般の部〉

スキップで親追ふ双子夏帽子

浜松市天竜区 老川 嘉子

みづうみのすべてが秋晴れに光る

静岡県富士市 相羽 美智子

〈高校生の部〉

母の日にかいて伝えるこの想い

浜松城北工業高校二年 小粥 龍ノ助

鈴虫かそれともセミか総裁選

静岡県西遠女子学園二年 桂 みやび

〈中学生の部〉

海の声泳げと僕に言っている

天竜中学校三年 鈴木 祐飛

西の空匠が研いだ月光る

笠井中学校二年 鈴木 心斗

〈小学生以下の部〉

おもいほりはたけの先生ひいじいじ

県居小学校二年 鳥居 慧

なつやすみこまにぎりしめがくどうへ

双葉小学校三年 鈴木 寿都

佳作

△一般の部▽

重きものみんなおろして日向ぼこ

浜松市中央区 宮田悦白

たんぽぽは幸せ色と言ふ園児

浜松市中央区 西澤寿江

十月の空に付箋を貼りたくて

浜松市中央区 川口八重子

木登りの子に夏雲の招きあり

埼玉県深谷市 持田義男

初浴衣ランウェイと化す六畳間

浜松市中央区 大高希久枝

雪の夜子に読む本の中も雪

神奈川県川崎市 下村修

△中学生の部▽

祖父と行くバス停までの青田風

笠井中学校一年 鈴木天翔

妹のおむつが取れる秋近し

天竜中学校三年 伊藤沙耶

妹と小声で相談「母の日は・・・」

天竜中学校三年 菖蒲こころ

あと少しプールの壁まであと少し

笠井中学校三年 松本旬栞

窓際で陽炎を食う昼休み

笠井中学校三年 神谷象太郎

道場に蝉より響く「面！！」の声

与進中学校一年 渡邊風

△高校生の部▽

試験済み駅で見上げる鰯雲

浜松城北工業高校三年 新村一稀

黒板のみはらしのいい水泳後

浜松商業高校二年 八木心愛

昼寝をしようになり鳥になる

浜松城北工業高校一年 樽松珠李

鯉のぼり予定決めずに泳ぐ空

星陵高校一年 山島一馬

散歩道落ちた椿を並べる子

浜松市立高校二年 小笠原実那

秋深し制服のボタンひとつ留め

浜松城北工業高校一年 田中達己

△小学生以下の部▽

秋の朝いつもとちがう長ズボン

大瀬小学校六年 水谷琉誠

夏の月車の中でじつと見る

有玉小学校六年 西岡煌

ひなだったつばめもみんなとびたつた

与進北小学校六年 間渕希美

木の根っこどんぐりねむる宝箱

中ノ町小学校六年 佐藤桜

夕焼けといっしょにまわる足かけ回り

有玉小学校六年 多田晃基

暑すぎてトマトかじるとまだ苦い

蒲小学校六年 吉見夏芽

奨励賞

△一般の部▽

行く年やダム湖の底に黙の郷

偕老の満つる月日や菊の酒

昼寝子の頬にうつすら晝あと

療養の妻の髪撫づ月の雨

秋の野へ両ひざかかへ子のとなり

風が乱して水が正して苗育つ

ぬぬ母の郵便受けへ差す新茶

ひとはみなみなもとひとつ秋夕焼

リボン付く娘の部屋の扇風機

踊りの輪抜けて名刺を配りをる

△高校生の部▽

自転車で一漕ぎシャツに滲む汗

春愁や母の恋しきひとり部屋

労いの子守歌かなキリギリス

送り火や空に広がる還り道

自粛中マンガ食べたら旅行気分

マフラーを片手に鏡とにらめっこ

お年玉テープがんじゃないよう出てこない

宿題の効率上げるかき氷

炎天下木々は動かず我動く

秋麗けれどペダルは重たくて

東京都世田谷区

石川昇

埼玉県新座市

山本末彦

浜松市中央区

中村つぎ子

浜松市天竜区

大城朝子

浜松市中央区

高山佳風

千葉県香取市

坂本正夫

浜松市中央区

榎原九月

埼玉県さいたま市

箱石敏子

福岡県宗像市

川口茂則

愛知県豊橋市

澤山十糸子

呼鈴の間のびしてゐる残暑かな

放牧の仔牛何追ふ鰯雲

釣り下手の水切り上手いわし雲

安寧の白や泰山木の花

青田道大念仏の笛太鼓

白息の日の出の色に染まりけり

音立てて水飲む子等に雲の峰

ファスナーのカーブなめらか春の服

大笹にどんぐり干して保育園

大太鼓村の隅まで秋祭り

静岡県掛川市

すかんぽ

神奈川県横浜市中区

沼宮内薫

栃木県宇都宮市

塩谷みつ江

兵庫県神戸市

小路利明

浜松市中央区

若杉稔夫

兵庫県姫路市

田辺富士雄

栃木県大田原市

木下明夫

京都府亀岡市

井上實

福岡県宗像市

梶原マサ子

浜松市中央区

鈴木直美

来世ではこたつが似合う猫になる

会えぬ夜月が綺麗と伝えたい

授業中裸で踊る夢を見た

初笑この瞬間が幸せだ

雷鳴を怖がる君と二人きり

夕焼けの太陽とてもいとおしい

炎天の勝敗決める我がシュート

氷柱落つばくの思いも砕かれて

東雲の彩に染まりし氷柱かな

浜松修学舎高校三年

黒杉美奏

浜松城北工業高校一年

水野光惺

浜松東高校一年

清水廉斗

浜松東高校一年

栗田茉優

浜松修学舎高校二年

柳木陽菜

島田樟誠高校二年

吉田遥陽

浜松東高校一年

磯部莞介

浜松修学舎高校三年

市川璃子

聖隷クリストファー高校二年

鈴木絢芽

奨励賞

△中学生の部▽

月白の流れる川は石畳

入野中学校三年

森下 柚夏

冬麗グロッケン鳴る準備室

積志中学校三年

有ヶ谷 璃乃

勉強中「スイカあるよ。」と母の声

笠井中学校三年

寺田 悠太

桜舞う今年は一人の通学路

御殿場市立御殿場中学校三年

齋藤 優芽

梅ジュース母の手作り二年ぶり

与進中学校一年

石田 珠希

夏の夜の我が家の名物セミの羽化

与進中学校三年

今田 美咲

夜桜や声を潜めた恋話

与進中学校三年

山崎 頼光

筆箱にお守りと推し増える夏

与進中学校三年

山田 歩

梅雨の花横通るたび袖ぬれる

中郡中学校一年

伊藤 蓮

奈良の鹿突撃されたが可愛い目

入野中学校三年

水野 敦貴

△小学生以下の部▽

祖母にあて暑中見舞いを書きつづる

蒲小学校六年

兼松 奈緒

雨がふる一つ一つが夏の色

与進北小学校五年

海野 志帆

川近く夕日の下で秋刀魚焼く

中郡小学校五年

澤田 龍河

息白くこごえる朝のさん歩道

与進北小学校五年

竹内 友海

梅雨空に代わり南の高気圧

有玉小学校六年

風間 龍輝空

山登り奥に進めば夏霞

与進北小学校六年

中嶋 美結

沢登り沢がにの巣は岩の中

中郡小学校五年

谷田貝 友翔

かきごおりよそみしてたらやまきえる

舞阪小学校四年

鈴木 舞凜

あげはちよう外ですわれば飛んでくる

蒲小学校六年

稲本 佳央

うちのあにドリルやらずにみずあそび

与進小学校二年

足土 云風

何本か鳥居数える子ら薄暑

入野中学校三年

山本 晃一郎

愛猫もゆかでのびてる夏休み

丸塚中学校一年

権田 恭太郎

愛犬が涼しい笑顔でお出迎え

笠井中学校三年

池川 結香

くまさんと夢でお散歩ハンモック

積志中学校三年

川口 凜

テスト中花火が鳴った気が散った

笠井中学校一年

田邊 颯

あめんぼにどう泳ぐのと聞いてみる

笠井中学校二年

関 和海

春風や友も大吉ハイタツチ

入野中学校三年

瀬崎 優愛

泣きやんだ伝わる英語風光る

入野中学校三年

朝倉 羽南

金魚鉢あいさつかわす水の中

天竜中学校一年

秀島 拓弥

夏の川流れの力あなどるな

蒲小学校六年

角川 誠一郎

広島でチリリンとなる風鈴が

蒲小学校六年

斉藤 結羽

台風が休日ねらいやってくる

舞阪小学校五年

安井 悠太

学校をこいしく思う夏休み

双葉小学校四年

内田 旭

こわすぎる笠井の祭りのてんぐさま

笠井小学校四年

吉村 開

なつのうみすなはまのすなあつつあつ

笠井小学校三年

鈴木 陸仁

かのおとたとびおきたときさされてる

蒲小学校六年

岡 宗佑

いつだってぼくのヒーローカブトムシ

県居小学校五年

山中 湊仁

暑すぎてせみたち鳴くのをあきらめた

県居小学校五年

松本 杏

せみのうかいつになったら鳴くのかな

笠井小学校五年

鈴木 碧仁